

作家旧蔵書研究の可能性

—芥川龍之介旧蔵書・洋書を例として—

澤 西 祐 典

1. はじめに

本稿では、芥川龍之介の旧蔵書・洋書を例として、近代作家の旧蔵書研究の可能性について考えていきたい。現在、芥川旧蔵書・洋書について、まとまった資料が確認できるのは、日本近代文学館に保管されている洋書 639 点 819 冊¹⁾が最大のコレクションである。次いで、山梨県立文学館にある洋書 20 冊、藤沢市文書館所蔵の洋書 2 冊がある。また、神奈川近代文学館にある堀辰雄旧蔵書（堀辰雄文庫）にも芥川の旧蔵書が数点確認されている²⁾。堀辰雄文庫に含まれる芥川文庫については、第 3 章の第 2 項「散逸した芥川旧蔵書」で改めて言及する。日本近代文学館・山梨県立文学館・藤沢市文書館にある芥川旧蔵書・洋書は全部で 841 冊となり、厩大な数にのぼる。芥川の遺族より日本近代文学館に旧蔵書が委託された際、三好行雄は、『日本近代文学館図書・資料委員会ニュース 第一二号』（1970・7）の「芥川龍之介旧蔵書」で、次のように述べている（傍線は引用者による。以下同様）。

芥川龍之介の旧蔵書が原稿や写真などの資料とともに、芥川家から館に寄贈された。洋書にはかなりの手沢本がふくまれている。それらを調査して図書委員会ニュースで報告しろという厳命なのだが、なにしろ勤務

先は安保騒ぎが一段落して、六月からの新学期がやっと軌道にのったばかりという有様で、宝の山を前にしながら腰を据えて調査する暇がない。以下は当座の責をふたぐべく、匆忙の間に試みたアト・ランダムな印象記に過ぎない。〔中略〕その他、ワイルド夫人の“Ancien Legends of Ireland”（この本は一九一九年に発行されている）の欄外にく大食の呪ヒ徴アリ今秋ノ秋>という俳句ふうな書入れがあったり、アナトール・フランスの英訳短篇集“The Path of Glory”の表紙裏にく呈芥川龍之介様大正六年二月・紐育市正/S Naruse/Nov. 28ty 1916/New York City>という、成瀬正一からの献辞があったりする例もある。詳細に調査すれば、芥川龍之介論の有力な論点がいくつも引出せそうな、予感に満ちた旧蔵書の充棟は壯観である。

この「宝の山」を有効活用できているかどうか、我々は問われている。これまでに書誌や書き込み等に関するまとまった報告としては、日本近代文学館の芥川文庫については、三好行雄「芥川龍之介旧蔵書」（前掲）、『〈日本近代文学館所蔵資料目録2〉芥川龍之介文庫目録』（日本近代文学館、1977・7）、饗庭孝男「芥川の読書」（館報『日本近代文学館』第38号、1977・7）、三好行雄「芥川龍之介の書き入れ」（館報『日本近代文学館』第45号、1978・9）、「〈所蔵資料公開〉芥川龍之介資料」（館報『日本近代文学館』第51、57、58、59、61、62、63、64、65、66、71、73、78号）、倉智恒夫「芥川龍之介読書年譜——フランス文学関係図書——」（『比較文学研究』1983・4）、倉智恒夫「芥川龍之介読書年譜——英・露・独・北欧文学関係図書——」（『現代文学』1983・

6)、「芥川龍之介資料——旧蔵書への書入れ——」（石割透編『日本文学研究資料新集 20 芥川龍之介 作家とその時代』有精堂、1987・12）、拙稿「芥川龍之介旧蔵書の洋書調査・補遺」（『芥川龍之介研究』2013・9）、拙稿「芥川龍之介における海外文学受容について——旧蔵書を通して見える風景——」（京都大学、学位論文、2015・3）などがある。山梨県立文学館については、飯野正仁「山梨県立文学館所蔵「芥川龍之介旧蔵洋書」目録」（『資料と研究 第五輯』（山梨県立文学館、2000・1）、藤沢市文書館については、『芥川龍之介自筆資料目録（附・葛巻家資料目録稿）』（藤沢市文書館、2006・3）、庄司達也「葛巻義敏——アテネ・フランセの青い季——」（『青い馬 復刻版 別冊 解題・総目次・執筆者一覧』三人社、2019・6）にくわしい。以降では、「予感に満ちた旧蔵書の充棟」の可能性について、実例を挙げながら整理していきたい。

2. 旧蔵書を通して見えてくるもの

2.1 作品の材源

吉田精一が「芥川龍之介の生涯と芸術」（『芥川龍之介案内』岩波書店、1955）で 62 作品の材源に触れたように、芥川は古今東西の書物を渉猟し、自家薬籠中の物としたことで知られる。旧蔵書を手掛かりに、作品の材源が見つかることも少なくない。小説ではないが、例えば随筆「近頃の幽霊」（『新家庭』1921・1）は、Dorothy Scarborough 著 *The Supernatural in modern English Fiction* (New York, Putnam, 1917) に拠って執筆されており、随筆「骨董羹」中の「妖婆」（『人間』1920・4）も同書に拠って執筆されていると推測さ

れるⁱⁱⁱ。焼失した、ウィリアム・モリスに関する芥川の卒業論文についても、旧蔵書の書入れなどを手掛かりにおおよその内容が推測できた^{iv}。

しかし、芥川が読んだ書籍は現存する旧蔵書だけではない。「芥川龍之介文庫和漢書の書き込みについて」(『日本近代文学館年誌 資料探索』2009)や『日本近代文学館所蔵芥川龍之介文庫和漢書の書き込みに関する文献学的研究』(私家版、科学研究費補助金成果報告書、2011)で日本近代文学館所蔵の芥川旧蔵書・和漢書について網羅的な調査報告を行った須田千里は『芥川龍之介ハンドブック』(庄司達也編、鼎書房、2015)中の「蔵書」欄で、「芥川は、素材として使用した本を処分し、踪跡を眩まそうとしたのではないかとさえ思われる。特に和書に関して言えば、現存する蔵書はほんの氷山の一角であり、芥川の読過した書物は遥かに多かったと推察される。蔵書の分析が重要なのはもちろんだが、これらに縛れず、明治期の活版本も含めて幅広く探究する必要がある」と文章を締めくくっている。須田の言及は、和書を中心とした所感ではあるが、洋書に関しても当てはまる。書簡や作品内での言及を基に、芥川の読書書誌をまとめた志保田務・山田忠彦・赤瀬雅子編『芥川龍之介の読書遍歴 壮烈な読書のクロノロジー』(学芸図書株式会社、2003)を繙いてみるだけで、芥川文庫として現存する旧蔵書が「氷山の一角」であることが容易に理解できる。また、たとえば須田「芥川龍之介「切支丹物」の材源(二)：『さまよへる猶太人』」(『京都大学國文學論叢』第26巻、2011・9)が指摘した「さまよへる猶太人」(『新潮』1917・6)の典拠 Sabine Baring-Gould 著 *Curious Myths of the Middle Ages* (vol.1、1966) や、今野喜和人「芥川龍之介「二つの手紙」の世界——クロウ夫人『自然の夜の側面』の寄与——」

で「二つの手紙」(『黒潮』1917・9)の材源として指摘のある Catherine Crowe 著 *The Night Side of Nature* (1848)などは芥川文庫に見当たらず、芥川が編纂した *The Modern Series of English Literature* の選書元の一つである Edward J. O'Brien 編 *The Best Short Stories of 1918* (1919)も同様に見つからない。他にも、「さまよえる猶太人」内で「基督教国にはどこにでも、「さまよえる猶太人」の伝説が残っている。[中略]最近では、フィオナ・マクレオドと称したウイリアム・シャープが、これを材料にして、何とか云ふ短篇を書いた。」という記述は、William Sharp の短篇“The Gypsy Christ”を指すと考えられるが、芥川文庫に同作を収録している William Sharp の著作は見当たらない。どうにも「素材として使用した本を処分し、踪跡を眩まそうとしたのではないかとさえ思」えてくるが、須田が提言するように、材源に関しては旧蔵書に縛られず、幅広く探究していくことが肝要といえよう。

2.2 手沢本と未読本（アンカット本）について

芥川の旧蔵書・洋書には書き入れがある手沢本も多く、主要な書き込みについては、倉智恒夫「芥川龍之介読書年譜——フランス文学関係図書——」(前掲)、倉智恒夫「芥川龍之介読書年譜——英・露・独・北欧文学関係図書——」(前掲)、「芥川龍之介資料——旧蔵書への書入れ——」(前掲)などに報告がある。しかし、遺漏も多く、留意が必要である。たとえば、Ambrose Bierce の全集中の評論・随筆集 *Collected works vol.10 The opinionator* (New York, Neale, 1911)について、管見の限り、これまで書き込みの指摘はないが、27頁の“On literary criticism”の章に「後代モ後代ノ色眼鏡デ現代ヲ見ルサ」と

ある。このような見落とされた例は少なくなく、現在新たに行っている悉皆調査で補完を試みているところである。

一方で、書架にある図書であっても、芥川が目を通したとは限らない。しかし、洋書に限っては、未読の図書を特定できるケースがある。製本時に小口の三方ないし一方を裁ち切しない「アンカット製本」の書物が芥川旧蔵書に含まれていて、そのアンカット部分が裁断されずに、袋とじ状態のまま残っている場合が少なくないのだ。例えば、未開社会の神話・呪術・信仰を蒐集したジェームズ・フレイザーの『金枝篇』に関して、日本近代文学館の芥川文庫目録には 11 巻本（第三版）の第 3 巻（Sir James George Frazer 著 *The golden bough ; a study in magic and religion Part 3 The dying god. 3rd ed* [London, Macmillan, 1920]）が含まれている。本書はアンカット製本で、17 頁以降がすべて袋とじ（アンカット）のままになっていて、芥川が冒頭で読み止めたと考えられる。このようなアンカット状態で放置された未読（箇所を含む）本が、芥川文庫には相当数含まれており、現在の調査では、書き込みと合わせて、アンカットの状態についても正確な実態把握に努めている。

2.3 伝記の更新：読了日、学習参考書

旧蔵書の書入れから作家の足跡について、新たな発見があることもある。傍線や下線などを除いて「書き込みでもっとも多いのは、読了の日付」であり、芥川は「読み終えたときに、日付と場所を記入する習慣があった」ようだ^{vi}。倉智恒夫による前掲の二論文では、フランス文学関連図書とその他の洋書に分けて、それぞれ読了した日付と書籍名が編年体で報告されている。と

はいえ、ここでも遺漏や誤謬も少なからず散見される。たとえば、*Peter Pan and Wendy* (Hodder & Stoughton, London, [n. d.]) について、本文末尾には「Nov. 3rd '15/Tabata」と二行にわたって日付と芥川の自宅があった田端の地名が記されている。この書込みについて、倉智恒夫「芥川龍之介読書年譜—英・露・独・北欧文学関係図書—」では、「Nov. 3rd '25 Tabata」と誤った数字が報告されている。また、読書年譜にも書名があがっていない。芥川の読了日を示すと思われる書き込み「Nov. 3rd '15」の「'15」は、〈1915年〉もしくは〈大正 15 (1926) 年〉の二通りに解釈できるが、本書には Mabel Lucie Attwell の挿絵が使われており、Attwell が *Peter Pan* の挿絵を描いたのは 1921 年のことであるから、「'15」は「大正 15 (1926) 年」と確定できる。そのため、この書込みは芥川が本書を 1926 年 11 月 3 日に読了したということを示していることになる^{vii}。この時期、芥川は田端の自宅と鶺沼の下宿を行き来しているが、10 月 22 日付け中根駒十郎宛て書簡、10 月 29 日付け佐々木茂索宛て書簡、11 月 1 日付け小沢碧童宛て書簡などはいずれも鶺沼から出されており、芥川が 11 月 3 日に田端の自宅に戻っていた事実は *Peter Pan and Wendy* の書入れだけが示す事実である。この時期に書かれた短篇「彼」(1926・11・13 脱稿、『女性』1927・1・1 掲載) には、「あいつはどう考へても、永遠に子供であるやつだね」と *Peter Pan and Wendy* を髣髴とさせる一節もある。

その他、同様の例として、Max Beerbohm のエッセイ集 *And even now* (London, Heinemann, 1920) の書き込みについて、倉智「芥川龍之介読書年譜—英・露・独・北欧文学関係図書—」では「July 4th 1921」とのみ報

告されているが、現物には「July 4th 1921 Hankow」と地名「Hankow（漢口）」まで記されている。芥川の中国滞在中に読んだ一冊と考えられる。芥川の Beerbohm のエッセイと芥川の中国渡航ものとの関りについては、『芥川龍之介研究』第 17 号（2023 年 9 月予定）の新資料紹介論文内でくわしく記す予定であるが、旧蔵書を丹念に（再）調査することによって、これまで見過ごされてきた作家の足跡を知る手掛かりが眠っている可能性がある。

また、Leonid Andreieff 著 *The seven that were hanged* (London, Fifield, 1909) や Algernon Blackwood 著 *The empty house, and other ghost stories* (London, Nash, 1916)、Stopford Brooke 著 *English literature, with chapters on the literature of the Victorian age by Charles F. Johnson* (New York, American Book Co, 1900) などには、語句の意味を単語の下や本文脇に記すなど、多量の書き込みが確認できる。これらは英語学習や授業の教科書として使われた形跡と考えられるが、学生時代の芥川龍之介の横顔を偲ばせる貴重な資料といえる。

2.4 作家の文学観・読書傾向：アンデルセン、ゲーテ評伝、『ピーター・パン』、ドーデー、森鷗外

旧蔵書にある書き込みを辿ると、作家の文学観や読書傾向が見えてくることがある。たとえば日本近代文学館の芥川文庫には、童話作家 Hans Christian Andersen の著作が二冊ある。一冊目の *Fairy Stories for children* (London, Ward, [n.d.]) には、「教科書以外に始めて英語で書いた本を読んだのはこれが／始である、中学の二年の三学期の始めであった、と思ふ 一番はじ／めの

Heartfelt sorrow が何度よんでもわからなかつた／此本は先生に頂いたのである／一九〇九年二月 龍之介記」^{viii}と記され、芥川が初めて読んだ洋書であることがわかる。全 36 作品が収録されているが、そのうち 19 作品について、目次部分に赤色の「・」が附されている。赤いマークがある作品を列記すると次の通りである。“A Heartfelt Sorrow (心からの悲しみ)”、“In Years to Come (千年後には)”、“Thumbelina (親指姫)”、“Everything in its Right Place (みんなその正しい場所に!)”、“The Red Shoes (赤い靴)”、“The Silent Book (もの言わぬ本)”、“The Little Match Girl (マッチ売りの少女)”、“The Jumpers (高とび選手)”、“The Flying Trunk (空飛ぶトランク)”、“A Story (ある物語)”、“The Old Street Lamp (古い街灯)”、“The Metal Pig (青銅のイノシシ)”、“A Rose from the Grave of Homer (ホメロスの墓のバラ一輪)”、“The Little Mermaid (人魚姫)”、“The Shadow (影法師)”、“The Old House”、“The Jewish Maiden (ユダヤ娘)”、“A Picture from the Fortress Wall (城の土手から見た風景画)”、“The Golden Treasure (金の宝)”である。このうち“Thumbelina (親指姫)”には下線が施されている^{ix}。もう一冊のアンデルセンの著作 *Fairy tales* (London, Dent, 1918) の表見返しには、中西屋書店の購入シールが貼られている。本書収録の“*What the Moon Saw* (絵のない絵本)”には芥川のコメントが散見される^x。“*What the Moon Saw* (絵のない絵本)”は一夜ごとに、月が見た景色が語られる形式をとるが、各話の末尾に感想が書き込まれていて、第 2 夜末尾 (230 頁) には「ウマイ」、第 3 夜末尾 (231 頁) にも「ウマイ」、第 5 夜末尾 (233 頁) も「ウマイ」、第 14 夜末尾 (242 頁) には「good」とある^{xi}。第 16 夜 (242-243

頁)には二箇所書き込みがあり、242 頁末尾に「ウマイ」、第 16 夜の末尾 (243 頁)には「ボオドレエル以前コノ人アリ／ウマイ」と書かれている。第 16 夜は、ある道化役者の物語である。彼は生来の道化役者で、あらゆる言動が見る人の物笑いの種となり、そこかしこに笑いの渦を巻き起こしてしまう。そのため、どのような苦痛や憂鬱で気が塞がっていても、彼の顔に滑稽さを加えてしまうだけで、人びとをいっそう笑わしてしまう結果となるのだ。彼はある女優を愛するようになるが、彼女は別の道化役者と結婚してしまう。その結婚式でさえ、もっとも愉快そうに見えたのは、招待客の中にいた道化役者に他ならなかった。そして女優が亡くなってしまって、その葬式の日、傷心の道化役者は舞台にのぼるが、やはりいつも以上に観客を笑わせ、拍手喝さいを浴びることになる。その夜、彼はひとりぼっちで女優の墓に参るが、その哀愁漂う姿でさえ、誰かに見かけられたら「ブラボー、いいぞ！」と大喝采を浴びたであろう、と話はしめくられる。相反する内面と表層という二重性が引き起こすアイロニーという主題は、いかにも芥川好みの作品と言えよう。初期作品の「ひょっこ」(『帝国文学』1915・4)を髣髴とさせる。第 16 夜の書き込み「ボオドレエル以前コノ人アリ」は、同作が「地獄変」の典拠の一つとしても挙げられるボードレールの「英雄的な死 (悲壮なる死)」^{xii}あるいは「愚者とヴィーナス (愚人と女神)」(共に『パリの憂鬱』所収)などを連想させるからだろう。前者は王と道化をめぐる為政と芸術の相克の散文詩、後者は巨大な女神像に向かって孤独と悲哀を嘆く道化役者をうたったものである。「人生はボードレールの一行にも若かない」(「文藝的な、余りに文藝的な」『改造』1927・4～6・8)という一節が殊に有名で、芥川のボード

レール受容は『悪の華』への傾倒でも知られる^{xiii}が、“What the Moon Saw (絵のない絵本)”の書入れは、芥川のボードレール理解の補助線ともなるだろう。

また、“What the Moon Saw (絵のない絵本)”に見られた「ウマイ」「good」などの率直な感想やエピソードに対する合いの手のようなコメントが書き込まれているケースも多い。一例をあげると、ゲーテの評伝 Paul Carus 著 *Goethe with special consideration of his philosophy* (Chicago, Open Court, 1915) の 147 頁には「fool!」という未報告の書き込みがある。この頁は、ゲーテの人間性を示す逸話が披露されている部分である。とある晩餐の席で和やかに会食が進んでいたところに、ゲーテと初対面の敬虔な牧師が、お前は『若きウェルテルの悩み』の著者のゲーテなのかと問いただした後、『若きウェルテルの悩み』がいかにも恐ろしい著作で、倒錯した作者の心を救うには神に頼むほか望みはない、とゲーテに言い放ったことで、気まずい沈黙が生じる。それに対して、ゲーテは当意即妙な切り返しをみせて場を和ませ、牧師を含めて全員の信頼を勝ち得たというエピソードだが、「fool!」という感想は、牧師の不躰な言動を指して述べられていると考えられる。

他にも、手沢本には芥川の読書趣味や内面を偲ばせる下線が多数ある。たとえば *Peter Pan and Wendy* (前掲) にはすでに紹介した読了日の書き込みのほか、二箇所にも傍線の書き込みがある。一つ目は Chapter X “The Happy Home (第 10 章「楽しい一家団欒」)”の 200 頁 1 行目から 16 行目にかけて、黒鉛筆と思われる線で、行横に縦にラインが引かれている。下記がその引用だが、ここでは前後を含めて引用した。また、本文の脇(行横)にあった縦

線は、当該部分の文章に下線を施すことで置き換えている。^{ネバーランド}夢の国の子どもたちが、ウェンディを母親、ピーター・パンを父親に見立ててやり取りを繰り返した場面に続くシーンで、ウェンディとピーター・パンが会話している。

“Dear Peter," she said, "with such a large family, of course, I have now passed my best, but you don't want to change me, do you?"

“No, Wendy.”

Certainly he did not want a change, but he looked at her uncomfortably; blinking, you know, like one not sure whether he was awake or asleep.

“Peter, what is it?”

“I was just thinking.” he said, a little scared. “It is only make-believe, isn't it, that I am their father?”

“Oh yes,” Wendy said primly.

“You see,” he continued apologetically, “it would make me seem so old to be their real father.”

“But they are ours, Peter, yours and mine.”

“But not really, Wendy?” he asked anxiously.

“Not if you don't wish it,” she replied; and she distinctly heard his sigh of relief. “Peter,” she asked, trying to speak firmly, “what are your exact feelings for me?”

“Those of a devoted son, Wendy.”

“I thought so,” she said, and went and sat by her-self at the extreme end of the room.

“You are so queer,” he said, frankly puzzled, “and Tiger Lily is just the same. There is something she wants to be to me, but she says it is not my mother.”

「ねえ、ピーター」 ウェンディは言いました。「こんなにたくさん子どもを生んで、もちろん、わたしはもう女の盛りをすぎているわ。でも、あなた、このままのわたしでいいですね？」

「いいとも、ウェンディ」

ピーターは確かにこのままでいいと言いましたが、落ち着かないようすでウェンディを見ました。起きているのか寝ているのかわからない人のように、目をしばたたきながら。

「ピーター、どうしたの？」

「ちょっと考えていただけだよ」ピーターは少しビクビクしているように言いました。「ぼくがお父さんだというのは、ただのまねごとなんだろう？」

「ええ、そうよ」 ウェンディはとりすまして言いました。

「だってさ」 ピーターはすまなさそうに話を続けました。「みんなの本当のお父さんならね、ぼくはすぐく年をとっていなくちゃおかしいだろ」

「でも、みんなわたしたちの子どもよ、ピーター、あなたとわたしの」

「でも、本当じゃないだろ、ウェンディ？」 ピーターは心配そうにききました。

「ええ、あなたが望まないなら」ウエンディは答えました。ピーターの安堵のため息がはっきりと聞きとれました。「ピーター」ウエンディはできるかぎりきっぱりとした口調で言いました。「本当のところ、あなた、わたしをどう思っているの？」

「お母さん思いの息子と同じ気持ちだよ、ウエンディ」

「だと思っていたわ」ウエンディはそう言うと、部屋の一番奥まで行って座りました。

「きみて、ものすごく変だな」ピーターは本気でとまどいながら言いました。「タイガー・リリーも同じだけどね。彼女、ぼくの何かになりたがっているんだけど、お母さんじゃないって言うのさ」

「ええ、そうじゃないでしょうよ」ウエンディは怖いほど強い口調で言いました。] xiv

割り振られたジェンダーに戸惑うピーター・パンや、女心を察せられず、ウエンディの機嫌を損ねてしまうピーター・パンが巧みに描かれている。芥川が自身を仮託して読んだのではないか、とつい想像を逞しくしてしまう。同書 Chapter XIII “Do You Believe in Fairies? (第13章「妖精を信じてくれる?）」”にも、同様にラインが引かれている。傍線は244頁7行目から246頁13行目まで、3頁わたって引かれている。ここでは、紙幅の都合上、中心となる一部分だけを引用する。場面は、ティンカーベルがピーター・パンの身代わりに毒薬を飲んだことで、絶命しかけているところである。

Her voice was so low that at first he could not make out what she said. Then he made it out. She was saying that she thought she could get well again if children believed in fairies. Peter flung out his arms. There were no children there, and it was night-time; but he addressed all who might be dreaming of the Neverland, and who were therefore nearer to him than you think: boys and girls in their nighties, and naked papooses in their baskets hung from trees.

“Do you believe?” he cried.

Tink sat up in bed almost briskly to listen to her fate.

She fancied she heard answers in the affirmative, and then again she wasn't sure.

“What do you think?” she asked Peter.

“If you believe,” he shouted to them, “clap your hands; don't let Tink die.”

Many clapped.

Some didn't.

A few little beasts hissed.

The clapping stopped suddenly; as if countless mothers had rushed to their nurseries to see what on earth was happening; but already Tink was saved. First her voice grew strong; then she popped out of bed; then she was flashing

through the room more merry and impudent than ever. She never thought of thanking those who believed, but she would have liked to get at the ones who had hissed.

“And now to rescue Wendy.”

〔ティンクの声はあまりに低かったので、ピーターは初め、ティンクが何を言っているのかわかりませんでした。でも、じきにわかりました。ティンクはこう言っていたのです——もし子どもたちが妖精を信じしてくれるなら、きっとあたしはまだ元気になれる、と。

ピーターは両手を前に差し込みました。そこには一人も子どもはいませんでした。それに、今は夜です。でも、ピーターは、ネバーランドの夢を見ているすべての子どもたちに——その夢を見ているので、みなさんが考えているよりもずっとピーターの近くにいる子どもたちに呼びかけました。寝間着の少年少女に呼びかけました。吊るされたかごの中にいるインディアンの裸の幼子に呼びかけました。

「妖精を信じしてくれる？」ピーターは叫びました。

ティンクは自分の運命を聞こうと、もう元気になったくらい勢いよくベッドに起き上がりました。

ティンクには「信じる」という返事が聞こえたような気がしましたが、やっぱり聞こえなかったようにも思えました。

「どう思う？」ティンクはピーターに聞きました。

「もし妖精が本当にいると思うなら」ピーターは子どもたちに向かって訴えました。「手をたたいて。ティンクを死なせないで」

たくさんの子どもが手をたたきました。

何人かはたたきませんでした。

ほんのわずかですが、シーツなどと言うひどい子もいました。

拍手が急にやみました。まるで、無数の母親が、いったい何事か確かめようと子ども部屋に駆けつけたようでした。でも、ティンクの命はもう救われていました。まず、声が力強くなりました。ティンクはベッドから飛びました。そして、これまで以上に陽気で生意気な様子で部屋を飛びまわりました。妖精を信じてくれた子どもたちに感謝しようなどという気はさらさらなく、シーツと言った子どもたちをこらしめてやりたいと思っていました。

「さあ、ウェンディを助けに行くぞ」

この場面は、“Do you believe?”、“If you believe,” he shouted to them, “clap your hands; don't let Tink die.”と、ピーター・パンが妖精を信じるかどうか、（夢の国の子どもたちに問いかけているのだが）まるで読者に問いかけているかのような文章となっている（“Many clapped.”以下はその応答である）。芥川が物語展開に心惹かれたのか、読者へ語り掛けるような文章スタイルに引かれたのか、傍線の意図を定かにすることは難しいが、妖精という想像上の存在の生死を読者に委ねるというフィクショナルな試みに芥川が感心させられたのではないかと考えられる。このように、書入れや傍線部分と当該箇所を対照させて蓄積させていくことによって、随筆や書簡などの他者に宛てた文章からは立ちあがらない側面や読書趣味が見えてくる可能性がある。

また、アンデルセンに書き込まれたボードレールに関連する文言のように、作品の書入れが別の作家と結びつくケースもある。Alphonse Daudet の *The novels and romances vol.2* (Boston, Little, c1900) の 248 頁にある書き込み「昔水沫集でよんだ時にも感心したが／今読んでもうまい」もその一つであろう。当該書き込みは短篇“A Book-keeper”の末尾に記されている。この小品は、ドーデーの『月曜物語』所収の一篇で、森鷗外が『水沫集』（春陽堂、1892）に「みくづ」として訳出されている作品に他ならない。芥川は英訳で当該作品を再読したことになる。鷗外訳で読んだ時と変わらず「うまい」と感想を書きつけているが、芥川とドーデーの結びつきのみならず、森鷗外（『水沫集』）との新たな接点を明かす書き込みでもある。

2.5 旧蔵書全体の傾向

これまで芥川旧蔵書について、個別の事例について検討してきた。この章では、旧蔵書（洋書）全体として眺めた際の問題について取りあげたかったが、『芥川龍之介研究』第 17 号（2023 年 9 月刊行予定）にシンポジウム報告として載せる予定の原稿と重なる部分が多いため、くわしくは割愛する。報告原稿は、第 17 回国際芥川龍之介学会・東京大会の二日目（2022 年 9 月 25 日）のシンポジウムの口頭発表に基づくもので、シンポジウム発表では、日本近代文学館にある洋書をリスト化し、レーベルの偏りや原書がどの言語によって執筆されたか（原書なのか、翻訳書なのか）をユーザーローカル AI テキストマイニングによる分析（<https://textmining.userlocal.jp/>）を用いて詳述した。

ここでは、日本近代文学館の芥川文庫・洋書 819 冊について、オリジナルの言語がどの言語かを図示した画像（図1）のみを示し、詳細な報告は『芥川龍之介研究』第17号に譲ることとする。芥川の読書空間が多言語・多地域に広がっていること、英語が中心的な地位を占めるが、英語原書より英訳書が若干数多いことなどが表からも見てとれるはずである。また、書架には持ち主の好みが強くなる。レーベルの偏りを把握することで、芥川の読書趣味を把握することができる。そのことについても『芥川龍之介研究』第17号で触れる予定である。このような書架の全体像を把握していくことも旧蔵書研究においては重要なことだと考える。

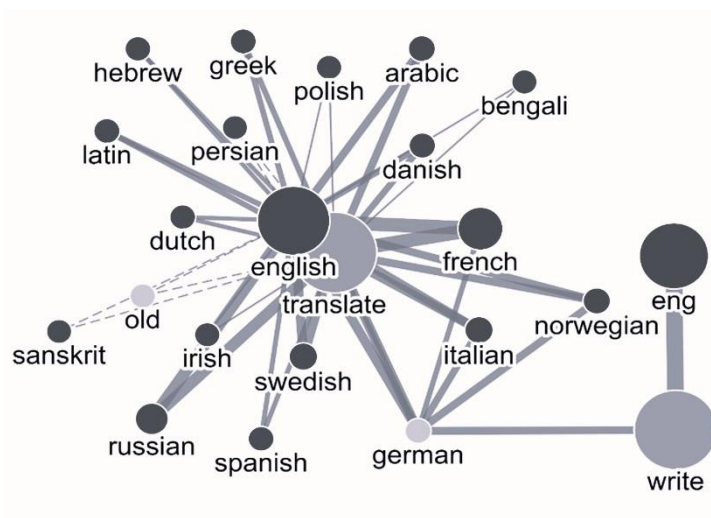


図1 日本近代文学館・芥川文庫（洋書）のオリジナル言語

3. 書物を通じたネットワーク

3.1 謹呈本など

三好行雄「芥川龍之介旧蔵書」(前掲)で、「アナトール・フランスの英訳短篇集 “The Path of Glory”の表紙裏にく呈芥川龍之介様 大正六年二月・紐育市正/S Naruse/Nov. 28ty 1916/New York City」という、成瀬正一からの献辞」があることが報告されているが、同様のケースは他にもある。拙稿「芥川龍之介旧蔵書の洋書調査・補遺」(前掲)にくわしいが、海軍機関学校時代の同僚 E.S.スティーブンソンや東京府立第三中学校の恩師・広瀬雄、友人の原善一郎からの献本が確認できる。これらの外にも、旧蔵書中に名刺が挟まれていることから、芥川の交際ぶりがわかるほか、Maxim Gorky 著 *The Note-books of Anton Tchekhov together with Reminiscences of Tchekhov* (Richmond, Hogarth, 1921) には、見返し部分などに「芥川比呂シ」の署名入りで落書きがあり、家族の交流の様子が窺える貴重な資料である。

3.2 散逸した芥川旧蔵書：松村みね子、堀辰雄文庫

芥川文庫に現存しない書籍があることは、すでに第2章第1項「作品の材源」で触れた。有名なものでいうと、フィオナ・マクラウド(ウィリアム・シャープ)全集の第二巻がある。これは、もともと松村みね子の蔵書だったと推察される^{xv}。松村の旧蔵書は、洋書は日本女子大学図書館、和書は東洋英和女学院図書館に寄贈されているのだが、洋書の中にマクラウド全集はあるが、『かなしき女王』(松村みね子訳、第一書房、1925)の原典に当たるはず

のマクラウド全集第二巻だけが歯抜けとなっている。同全集の第二巻を、関川左木夫氏が偶然、古書店で入手したところ、それが芥川の署名入りであることが南條竹則氏の指摘で判明した。現在は南條氏の所有となっている当該書は、松村から芥川に渡ったものと推察されている。

このような親しい間柄での貸借や贈答が頻繁にあったと考えられる。芥川から、堀辰雄へ送った初めての書簡（1922・11・18）の「二伸」には「なほわたしの書架にある本で読みたい本があれば御使ひなさい」という文言が認められる。また、随筆「スタヴロギンの告白」の訳者に（『作品』、1934・7）や「プルウスト雑記 神西清に」^{xvi}には、芥川の没後に旧蔵書の整理を行った様子が記されている。また、芥川の死が契機となって執筆された「聖家族」（『改造』1930・11）には、師である九鬼の旧蔵書の整理を行う様子が記され、「九鬼さんにずっと前に貰ったの〔引用者注：ラファエロの画集〕を、あの方の亡くなられる四五日前に、どうにも仕様がなくなって売ってしまったんです。今になってたいへん後悔しているんですけども……」という台詞がある。これらを踏まえると、神奈川近代文学館に保管されている堀辰雄文庫中の芥川の旧蔵書については、芥川が生前に貸与した可能性から没後に堀が持ち出した可能性まで、いくつかの経緯が考えられるが、少なくとも下記 3 点は芥川の旧蔵書と同定して間違いないだろう。①Ernest Dowson 著 *Dilemmas ; stories and studies in sentiment* (London, Mathews, 1912)、②Paul Claudel 著 *The Tidings brought to Mary: a mystery*(London, Chatto & Windus, 1916)、③Anatole France 著 *Little Pierre* (London, John Lane, The Bodley Head, 1920)。それぞれ、①本文最終頁(139 頁)に「R. Akutagawa

／Jan. 12th '16」と書き込み、②表見返しに「R. Akutagawa」の書き込み、③本文最終頁(297頁)に「15th／March 1924／Tabata」と書き込みがある。ポール・クローデルの『マリアのお告げ』など、堀辰雄にとって重要な書物も含まれているが、これらについてはまた稿を改めてくわしく検討したいと思う。

書架に現存しない書物については、このほか図書館や貸本屋での貸借、芥川自らの手に拠って処分されたもの、遺族による紛失など多数のケースがあると想定される。蔵書が形あるものであるからこそ、移動や消失が宿命づけられているものである一方で、松村や堀の例のように、移動によって明かされる交流の形態やドラマがあるともいえる。

3.3 他作家の旧蔵書の書入れとの比較：トルストイ『アンナ・カレーニナ』

ここまで芥川の旧蔵書のみを取りあげて論じてきたが、複数の作家の旧蔵書を可視化することによって見えてくるものもあると考える。例えば作家たちの旧蔵書に同一の書籍が含まれている場合、書き込み部分を比較することで、所有者が読書時に重要視している部分が浮き彫りになる。このような研究事例としては、奥野久美子「恒藤恭、芥川龍之介の白露戦争：トルストイの読書体験とあわせて」（『大阪市立大学史紀要』第7号、2014）がある。トルストイ『戦争と平和』について、恒藤恭がノートに筆写した部分と芥川が作品内で再構築したり、講演などで述べた眼目を比較したもので、厳密には旧蔵書研究ではないが、恒藤が「末期の眼に映る自然や人生の美しさ」にフォーカスしているのに対して、芥川が「細部の表現の大切さ」を重視してい

る点など、両者の違いが浮き彫りにされている。本科研課題「近代作家旧蔵書群を対象とする調査・保護・データ化と横断的分析に関する総合的研究（22H00641）」で、作家の旧蔵書群のデータが蓄積されることによって、このような比較がより進むことが期待される。

すでに多田蔵人氏が、第二回研究会（2022年8月27日実施）で日本近代文学館所蔵の正宗白鳥旧蔵書について研究報告を行い、正宗白鳥が所有していた『アンナ・カレーニナ』（Nathan Haskell Dole 英語訳）と島崎藤村が所有していた英語訳^{xvii}が同一訳であることを報告している。その後、論者が芥川文庫を確認したところ、芥川が所有していたのも同じ訳であることが判明した（London, Walter Scott, [n.d.]. 挿絵は Paul Frénzeny）。残念ながら作品に関する感想と思しき書き込みはないが、下線を中心に 29 箇所の書入れがあった。一例をあげると、舞踏会での Kitty の装いの描写（86 頁 19-23 行）に赤色のアンダーラインが施されている。

Kitty was looking her prettiest. Her dress was not too tight; her rosettes were just as she liked to have them, and did not pull off; her rose-colored slippers with their high heels did not pinch her, but were agreeable to her feet. All the buttons on her long gloves which enveloped and enhanced the beauty of her hands fastened easily, and did not tear. The black velvet ribbon, attached to a medallion, was thrown daintily about her neck. This ribbon was charming; and at home, as she

saw it in her mirror adorning her neck. Kitty felt that this ribbon spoke. Every thing else might be dubious, but this ribbon was charming. Kitty smiled, even there at the ball, as she saw it in the mirror. As she saw her shoulders and her arms, Kitty felt a sensation of marble coolness which pleased her. Her eyes shone and her rosy lips could not refrain from smiling with the consciousness of how charming she was.

〔それはキチイにとって、幸運な日の一つにあたっていた。衣装はどれも窮屈なところがなく、レースの襟もたるんだところがなく、リボンの花飾りもしわになったり、ちぎれたりしていなかった。弓なりにそったばらの色のハイ・ヒールの靴は、足をしめつけないどころか、かえていい気持ちにしてくれた。ふさふさしたブロンドのかもじは、まるで自分の毛のように、かわいい頭の上にぴったりのっていた。少しも形を変えないで、その手をつつんでいる長い手袋のボタンは、三つともはずれないで、ちゃんとかかっていた。ロケットの黒いビロードは、とりわけやさしく首を巻いていた。このビロードはまったくすばらしかった。いや、キチイは家で、鏡に自分の首を映しながら、そのビロードが話しかけているような気分におそわれたほどである。ほかのものはどれにも、まだいくらか問題の余地があったけれど、ただ、このビロードだけは優雅そのものであった。キチイは舞踏会へ来てからも、それを鏡に映してみても、にっこりほほえんだ。あらわな肩と腕に、キチイは大理石のような冷たさを感じたが、それは彼女のとくに

好きな感じだった。そのひとみはきらきらと輝き、赤い唇は、わが身の美しさに、思わずほほえまないのではいらなかった。] xviii

芥川は Kitty の舞踏会での心動きや煌びやかな衣装全体ではなく、衣裳の一部、非の打ち所がない黒いベルベットのリボンとそれにうっとりで見惚れる Kitty の描写に注目している。大河を織りなす、このような細部に芥川は感じ入っていたのだろう。白鳥の旧蔵書の書入れについては、多田氏の正式な稿を待ちたいと思うが、人物造形や心理描写に趣きを置いているように読める白鳥の書入れに対して、芥川の下線は（『戦争と平和』と同様）上記のような細部に着目していくものが多い印象がある。このような比較対照は、比較対象が増すほど有意義なものとなっていくことが期待される。

4. 結語に代えて

芥川旧蔵書の洋書に着目して、いくつかの項目に分けて旧蔵書研究の可能性について、できるかぎり新規な具体例を出しつつ述べてみた。むろん、旧蔵書研究の課題や展望について網羅できたわけではない。たとえば購入シールの問題がある。旧蔵書には購入元の書店のシールが貼られている書籍が多くある。これらをマッピングすることによって、作家の行動範囲（行きつけの書店）を特定することや、シールの版によって購入時期をある程度特定することも可能かもしれない。芥川文庫の全冊と堀辰雄文庫の数十点の洋書を実見した限り、明らかに購入元が異なっている。また、手元に置きたい本の造形にも人それぞれに好みがあるはずだ。芥川文庫と堀辰雄文庫ではやはり

ずいぶんと印象が異なっていた。書籍に含まれる挿絵についても別に述べるべきだったかもしれない。また、本の端を折って、マーキングを行っているケースなど、本稿で取りあげられなかったものはまだまだある。しかし、時間と予算が限られている以上、今後も優先順位をつけて作業を行っていく必要がある。

本稿は旧蔵書研究の課題と展望を整理できることを期して着手したが、冒頭で引用した三好行雄の言のように、アト・ランダムな印象記となってしまった感が否めない。現在の調査は、小澤純氏と共同で作業を行っている。調査の過程では、日本近代文学館の土井雅也氏、富樫瓊子氏、神奈川近代文学館のスタッフをはじめ、多くの方にご協力・ご尽力をいただいた。この場を借りて、感謝申し上げたい。今後調査が進むことによって、作家の個人研究だけでなく、より広がりを持った研究成果を公開できるよう努めつつ、先人たちの轍を確かめながら、着実に研究を進めていきたい。

注

ⁱ 『〈日本近代文学館所蔵資料目録2〉芥川龍之介文庫目録』（日本近代文学館、1977・7）掲載の久保乙彦「概要」では「図書・洋書 638点 809冊」と報告があるが、同目録に掲載されている洋書一覧の実数および実見の結果、639点 819冊である。

ⁱⁱ 神奈川近代文学館 HP (https://www.kanabun.or.jp/reading_room/keeping-collection/) の「収蔵コレクション」の堀辰雄文庫の内容欄に「890点。仏・独・英文学など堀旧蔵の洋書と洋雑誌。ブルースト、リルケらの著作、研究書には傍線や書き入れも多く、芥川龍之介の署名がある図書も含む。」と紹介されている。

ⁱⁱⁱ スカボローの著作と「近頃の幽霊」の関りについては、拙稿「*The Modern Series of English Literature* について——テキストの特色、第七・八巻の出

典、「近頃の幽霊」・「南京の基督」との関わりを中心に——（『芥川龍之介研究』第8号、2014・9）並びに鈴木暁世「イギリス怪奇幻想ミステリと近代日本文学——A・ブラックウッドと芥川龍之介を中心に」（怪異怪談研究会・監修、乾英治郎・小松史生子・鈴木優作・谷口基編『〈怪異〉とミステリ 近代日本文学は何を「謎」としてきたか』青弓社、2022）に詳しい。随筆「骨董羹」中の「妖婆」との関りについては拙稿「芥川龍之介の翻訳観」（『芥川龍之介研究』第16号、2022・12）で触れた。

iv 拙論「芥川龍之介と卒業論文'Young Morris'—旧蔵書中のウィリアム・モリス関連書籍を手掛かりに—」（『京都大学國文學論叢』第34号、2015・9）

v 注 (iii) の拙稿「*The Modern Series of English Literature* について」に詳しい。また、芥川編 *The Modern Series of English Literature*（全8巻、興文社、1924-1925）の一部は、『芥川龍之介選 英米怪異・幻想譚』（澤西祐典・柴田元幸・共編訳、岩波書店、2018）として日本語訳の刊行を行った。

vi 倉智恒夫「芥川龍之介読書年譜——フランス文学関係図書——」（前掲）

vii *The Modern Series of English Literature* の第一巻序文で、編者はこの巻を編するにあたり、Wilde や Lady Gregory の外に Barrie を加へるつもりであった。が、頁数の都合その他の理由により、やむを得ず“Peter Pan”の数篇を“The Jungle Book”の数篇に取り換へたのである」と記されている。*The Modern Series of English Literature* の編纂が1924年ごろのことであるから、（序文に偽りがなければ）芥川は1926年11月に *Peter Pan and Wendy* を再読したことになる。芥川の没後に刊行された菊池寛・芥川龍之介共訳『アリス物語』（『小学生全集』第28巻、興文社・文藝春秋社、1927）の前書きで、菊池寛は、「不思議の国のアリス」と「ピーターパン」の翻訳は、芥川が担当予定だったと証言しており、この再読が小学生全集の構想に寄与した可能性や翻訳準備のための再読であった可能性などが考えられる。

viii 三好「芥川龍之介の書入れ」（館報「日本近代文学館 第45号」）、倉智「芥川龍之介読書年譜——英・露・独・北欧文学関係図書——」に報告がある。表記に異同があるが、現物に従った。

ix 260頁、261頁、265頁に確認できる。260頁30行目“tiny as she is”と261頁5行目“decking out”、同頁20行目“to and fro”の三箇所の黒色下線は、英語のイディオムに引かれているところから英語学習用のアンダーラインと考えられる。赤線は261頁25-26行目 “And what is more, they determined that it

should never happen”、同頁 33 行目“right out of the country”の二箇所は親指姫を逃がそうとするヒキガエルから逃がそうとする小魚たちの心情を表す文章に引かれている。265 頁 15-19 行目の黒線は、モグラが通路で瀕死で横たわる小鳥に投げかける心無い台詞“*He will not chirp again. It must be a pitiable lot to be born a bird. Heaven be praised that that will not befall any of my children ; a bird like this has nothing in the world but his tweet, tweet ! and so he has to die of hunger in the winter.*”に引かれている。

x 244 頁と 387 頁の書き込みについては日本近代文学館館報第 57 号に報告がある。倉智「芥川龍之介読書年譜—英・露・独・北欧文学関係図書—」にはその他の書き込みも含めて報告がある。ただし、「*good*」(241 ページ)とあるのは、242 頁の誤りである。

xi 「絵のない絵本」は、英訳版のほぼすべての版で、新婚初夜を思わせる第十一夜が割愛されているという（荒俣宏「解説 アンデルセン生誕二百年の、ささやかな贈りもの」『アンデルセン童話集』下巻、文春文庫、2012）が、芥川の所有していた版では第十一夜も訳され、オリジナルと同じ全三十三夜構成である。

xii 諸田京子「芥川龍之介「地獄変」論：ボオドレールの「英雄的な死」をめぐる」(『香椎潟』第 40 号、1995 年 3 月)

xiii 芥川のボードレール受容に関しては、饗庭孝男『日本近代の世紀末』(文藝春秋社、1990)、小澤純「芥川龍之介「歯車」に宿るアーカイヴの病：日本近代文学館・山梨県立文学館・藤沢市文書館の所蔵資料を関連させて」(『日本近代文学館年誌：資料探索』第 14 号、2019)などに詳しい。

xiv 邦訳には大久保寛訳『ピーターパンとウェンディ』(新潮文庫、2015)を用いた。

xv 中野善夫「訳者あとがき」(フィオナ・マクラウド／ウィリアム・シャープ『夢のラウド F・マクラウド／W・シャープ幻想小説』国書刊行会、2018)。以下、この段落は主として同「訳者あとがき」に拠っている。

xvi 初出は「一」が『新潮』1932 年 8 月、「二」が『椎の木』1932 年 8 月、「三」が『作品』1932 年 8 月。該当部分の初出は『椎の木』。引用した部分には、初刊本『狐の手套』(野田書房、1936・3)に収録される際に、修正が施されている。引用は改定後の本文を底本とする『堀辰雄全集 第三巻』(筑摩書房、1977・11)に拠ったが、内容に関わる改訂は以下の通り。①初出「僕はこの頃、屢、

数年前澄江堂の蔵書を整理してゐるうちに、」→全集「僕は、数年前澄江堂の蔵書を整理してゐるうちに、」。②初出「英訳本の巻末に見出した数行の書入れ」→全集「英訳本の余白に見出した数行の書入れ」、③初出「僕はいまハルトマンまで読んでみる気はしない」→全集「僕はいまバトラアまで読んで見る気はしない」、④初出「ハルトマンを頭に入れて帰つてきた」→「バトラアを頭に入れて帰つてきた」。このうち②の、「数行の書入れ」を見いだしたのが、英訳本の「巻末」から「余白」に改められているのは、堀辰雄が芥川旧蔵書を検め直したからどうかはわからないが、事実在即している。

xvii 剣持武彦「トルストイ『アンナ・カレーニナ』と島崎藤村『家』」（『近代の小説 比較文学の視点と方法』笠間書院、1975）

xviii 邦訳は木村浩訳『アンナ・カレーニナ（上）』（新潮文庫、1972）

※本稿は、JSPS 科研費 JP19K13080 及び 22H00641 の助成を受けたものである。